
縛鎖の印：断片

権兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

縛鎖の印：断片

【Nコード】

N9529P

【作者名】

権兵衛

【あらすじ】

これは、これから始まる物語のカケラに過ぎない。
ゆえに、断片。

この世界に、純粋なものがあるとするとするのならば、『ソレ』は一体どんなモノだろうか。

人を映す鏡にも、目に見えない凹凸がある。

透き通った青空にも、空の高低によって差異がある。

例えば、紙を黒一色で染め上げても、そこにはきつとムラが残るだろう。

この世界に、純粋なものはない。

一点がその色だけでも、隣の点は別の色であるかもしれないからだ。

それが面となれば尚更だろう。

ただ一つの要素だけで成り立つ面など、この世界の全てを探したところでどれだけあることが。

そもそも、物体とは元素の集合体。

素粒子が寄せ集まって成り立っているものだ。

それだけの『同じだけど違うもの』が集まって出来ているのだから、『そのみ』であることはありえない。

ならば、純粋なものとはどこにあるのか。

そもそも、そんなモノがあったりするのだろうか。

この雑多にして数多なる世界に、『そのみ』の、純粋なものなど――

空気が、揺らめいていた。

夜の闇を押し退けて、朱色の明かりが辺りを同じ色に染めている。唸りを上げているのは、空気と、炎。

その中に時々混じって聞こえるのは、燃え盛る家の中にいる人間の声だろうか。

この家に誰が住んでいるのかは、知らない。

しかしこの家が燃やしやすそうなのは、少し前から知っていた。前に散歩に出たときにたまたま見つけたその家は、隣の家から少し離れていて、家自体が大きくて、それでいて庭にも簡単に入れそうだったので目を付けていたのだ。

バチンと、燃える家の一部が爆ぜる。

二階辺りだろうか。昼間に見たら勉強机があったので、きっと子供部屋だろう。

子供の年齢は幾つくらいだろうか。

小学生か。

中学生か。

高校生か。

大学生ともなれば勉強机などほとんど使わないだろう。遊び呆けるに決まっている。

今さっき聞こえた悲鳴は、あの部屋で寝ていた子供の声だったのだろうか。

熱かったのか、それとも、苦しかったのか。

呼吸は出来ないだろう。肌も熱に曝されて、のたうち回るような苦痛だったに違いない。

自分が焼ける匂いを嗅いだりしたのだろうか。脂肪分が焼け爛れるときの、あの、ステーキが焼けたときのような匂いを。

こうして遠くから燃える家全体を眺めるのも好きなのだが、焼かれて身悶える人間を見るのも、またそれはそれで乙なものだ。

なんといても、そのダンスは一生に一度しか踊ってもらえない、レアリティの高いダンスなのだから。

轟々と炎が盛り、白を基調としていた家が黒炭と化して、やがて灰と崩れていく。

それを迎える刹那の、なんと儚いことだろう。

多額の金と、多大な手間暇をかけて建てられた家が、そこに住む家族ごと炎の中で死に絶えていくのだ。

それはまさに、一つの大きな『死』であった。

『死』を以てフィナーレを迎えた炎の祭典を、ただの一人で鑑賞し終えて、彼は満足げに頷いた。

もうそろそろ、この場に消防車が来るだろう。隣の家の方が、すでに消防に連絡しているはずだ。

自分もここを立ち去るとしよう。

もう、充分楽しんだから。

そう思っ、まだ小さな火が燦っている家に背を向け、歩き出すとする。

「待てよ」

何処からか、彼に向かって声がかげられた。

声がした方に目を向けてみると、近くにある木に、少年が背をもたせて立っていた。

木があることは知っていたが、そこに少年はいつからいたのだろう。

彼は不思議に思う。

ここには自分以外、誰もいなかったはずなのに。

「なあ、あの家に火をつけたの、あんたですよ」

少年はかろうじて敬語で、そう言ってきた。視線は燃え尽きた家の方を示している。

「さあ、なんのことかな。僕も火事に気付いてここに来たばかりで」

「ずっと見ていたクセに？」

少年は間髪入れずに切り込んできた。

自分を、監視していたとでもいうのか？

右手をグッと握り、少年の方を見る。その口に浮かんでいる薄ら笑いが、気持ち悪い。

「自首しちゃどうですかね」

少年が一步近づいてきた。両者の距離は5m程だろうか。彼は目算でそう測る。

普通の歩幅で四歩弱。大股で歩けば、二歩と半分、といったところか。

——もう少し、距離を詰める必要があるか。

「自首？ 僕が？ 何を根拠にそんなことを言うんだよ、君は」と、彼は言つて、自分からも一歩近づいた。

「根拠とかは——」

少年が言いかけたところで、彼は身を低くして一機に踏み出した。力を込めた右手を突き出し、少年が逃げ切れないタイミングで手の中のライターを外に出す。そして、シュツ、とライターの石を一擦り。

途端、夜闇に直径2mはあろうかという紅蓮の花が咲いた。

少年の身体が、丸々炎に包まれる。

「ツツツ！——ツ！」

飛び退いた彼の前で、少年は両腕をばたつかせながら藻掻いた。「無理だよ。一度灯したら消えない。僕が消さない限りはね」

心の底から湧いてくる優越感が、彼の顔に笑みを作る。その右頬には、まるで炎を思わせる赤い痣のようなモノがかすかな光を明滅させていた。

最大火力で喰らわせてやった。

数分もしないうちに、骨まで焼き尽くされるだろう。

「……でも逃げなきゃ、か」

この少年が焼き尽くされるまでを見届けたいが、さすがに誰か来るかもしれない。

逃げる必要があつた。

「誰だか知らないけど、運が悪かったね。それじゃあね」

彼は、軽く手を振るとその場から立ち去ろうとする。しかし——
「う、お」

前に出そうとした足が、動かなかった。

完全に虚を突かれた彼は、つんのめって転びかけてしまう。

「なん、だ……」

なんとか踏み止まるが、やはり片足が動かない。どころか、何かに引っ張られているような感覚すら覚える。

やや動転して彼が足を見ると、その足首に何かが巻き付いていた。
「……鎖？」

いびつな楕円形の輪っかが連なっているそれは、確かに鎖だった。
黒い。一点の光沢もない、夜の闇すら明るく思えるような純粋な黒
色の鎖が、彼の足を絡め取っていた。

はぁ……。

と、これみよがしに大きなため息が聞こえてくる。

彼が驚いて向くと、炎に巻かれたはずの少年が、上体をゆっくり
と起こすところだった。

「いきなりすぎでしょう、あんた」

少年は力の抜けた言い方で言ってきた。

服こそ多少焦げ目は付いているものの、その顔や髪は一切焼けて
いない。

「バツ」

と、彼は思わず声を出していた。

そんな馬鹿な。焼けないはずがない。焦げないはずがない。そん
なはずはないと、驚愕に彩られたその顔が言っている。

見れば、鎖は少年の方から伸びてきているではないか。

「やっと見つけてきてみれば、とんだ小物だったか」

少年の物言いは、いかにも残念そうであった。その肩の落としっ
ぷりは、いつそ脱力しているとすら言えそうな勢いである。

「お、おまえは、何だ！ おまえは！」

彼はもはや平静を保っている余裕もなく、唾を飛ばしながら叫ぶ。
問いかけというか、それは半分悲鳴でもあった。

「や、焼いてえ——！」

と、彼が少年にまたライターを向けようとした。

「喚くなよ」

敬語をやめた少年が、彼に向かって右手をかざす。その、地面に
落ちた影から、何かが伸びてきた。

それは鎖だった。

彼の近くまで伸びてきた影の鎖が、彼の腕に巻き付くと共に、黒い鎖が実体化する。

「ふ、ぐあ……！」

凄まじい力で締め上げられて、手の中のライターが落ちた。

「まあ、一匹捕まえられただけでも収穫ではある、か」

「ひ、ひい！」

少年に近づかれて、彼は情けない悲鳴を上げる。それに少年は、頬を掻いて呟いた。

「人、殺したよな」

「や、焼いただけだよ！ 気持ちよくなるって、や、焼けば、イライラが消えるって言われて、だから、ば、僕は……！」

「焼き殺したんだろ」

少年が近づくと、その影から次々に影の鎖が伸びて、彼の身体に巻き付いていった。

そしてそれは実体化を重ね、彼はのしかかってくる鎖の重みに押し潰されて、その場に身体を落とす。

「あ……、ああ……」

彼は、その恐怖に見開かれた瞳で、自分の眼前に立つ少年を見上げた。

視線を逸らしたくとも逸らせない。もはや彼は、身動き一つ取ることすら出来なかった。

その瞳がハッキリと捉える。

月明かりを背にした少年の顔に、腕に、露出している肌にクツキリと張り付いた、黒い鎖のような痣を。

「まさ、か……、あんた、カ、カイン……」

震える声で言って、彼はゴクリと喉を鳴らす。

少年は彼に顔を寄せ、その頬に瞬いている炎型の痣を睨み付けながら、告げた。

「俺はおまえを救わない」

そしてさらに伸び来た影の鎖が、彼の全身を隈無く包み込んでい

く。

「ひ、あ！ ああ、あ！ うぎ、た、助けエ……」

最後まで助けを請う彼に背を向けて、少年は立てた親指をグルンと落とした。

「墜ちな」

その言葉と共に、鎖の中の質量がフツと消失した。

同時に、彼の身体を縛っていた鎖も闇に溶けて失せていく。

そこにはもはや、何もなかった。

ただ、彼が使っていたライターだけが、地面に転がっているだけだ。

遠くから、サイレンの音が聞こえてくる。消防車がや々と来たらしい。

「ザインが」

少年は未だ燦る民家の方に目を向けると、忌々しげに舌を打って踵を返した。

それが、この夜あったことの一部始終である。

（後書き）

ブログのつもりではありますが、さて、どんな塩梅でしょうね。

正直、ドキドキしつつ投稿してみました。

ご意見、苦情など、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9529p/>

縛鎖の印：断片

2011年1月5日01時40分発行